一

小倉の大里から長崎まで通じる長崎街道のうち、黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田の筑前六宿を六宿街道と呼ぶ。

坂崎磐音が山家宿から内野宿への間に横たわる長崎街道最大の難所、冷水峠（九百余尺）を越えた日、旧暦七月は八月に変わっていた。

石畳の山道を九州諸大名が参勤に、長崎奉行は赴任帰任に、阿蘭陀商館長は江戸参府に使い、またただ一つの海外の窓口長崎に南蛮の諸学問を学びに行く学者も文人も、さらには交易に携わる商人たちも越えた。

冷水峠の由来は、『筑前国続風土記』に、

「東の方下二町許山間に冷水出る処あり」

と記されたことから名付けられたように、湧き水にあった。

昼前の刻限、磐音は田代宿の旅籠で握ってもらった麦飯を冷水で喉に流し込んだ。

峠の芒は枯れ尾花に変わって晩秋の気配を濃く漂わせていた。

山で暑い夏を過ごした秋蜻蛉が里に下りていこうとしていた。

磐音も秋蜻蛉の飛翔に合わせるように内野宿へと下っていった。

その頭裏には、もはや異国情緒の長崎の記憶は薄れていた。ただ一足進むたびに鮮明さを増すのは、奈緒があんにょうとしか名も知らぬ遊女に残した画文の世界だ。

番いの鴛鴦が遊ぶ泉水は、坂崎家の庭だった。

兄の琴平に連れられて初めて磐音の屋敷を訪れた奈緒は、鴛鴦が水に遊弋する光景をいつまでも独り眺めていた。

黄昏が近付き、奈緒を迎えに行ったのは磐音だ。

泉水の水が黄色に染まり、奈緒の白い顔も柿色にまぶされていた。

「磐音様」

と奈緒がふいに磐音の名を呼び、

「奈緒は磐音様の嫁になります」

と言った。

磐音はそれが自然に聞こえた。

「鴛鴦のように夫婦になるか」

「はい」

なんの疑いもない返事だった。

「よし、磐音も奈緒を嫁にいたそう」

磐音のそれも迷いなき返答だった。

奈緒が振り向いて磐音を見た。

「だがな、このことはしばらくの間、二人だけの内緒にしておくぞ」

「はい」

磐音は奈緒の手を引くと琴平たちが待つ座敷に駆けていった。

あれは、奈緒が四つか五つの年か。

十数年後、奈緒は自ら苦界に身を投じ、遊里から遊里に売られる思い出に朋輩に描き残したのが幼き日の光景だ。

鴛鴦や　過ぎ去りし日に　何思ふ

奈緒は鴛鴦に自らの運命を重ね合わせていた。そして、

（奈緒はおれが追ってくることを願っているのではないか）

と確信した。

（おれの務めは奈緒を生涯見守ることだ）

磐音は改めて心に誓うと坂道に足を速めた。

筑前六宿の四の宿、内野は木屋瀬、飯塚に次ぐ宿場だ。峠から半里余りを秋蜻蛉と競うように内野宿に下った。が、磐音の足はさらに飯塚を経て八里十一丁（およそ三十三キロ）先の小屋瀬宿へと向けられた。

磐音は、斜めに風呂敷を背負っていた。その中には奈緒が描いた白扇と百五十両近くが包み込まれている。

筆峰神仙は、小倉に向かう磐音に蘭学仲間を紹介してくれた。さらに中川淳庵は、日見峠まで磐音を送ってきた。

「坂崎さん、江戸で会うときは奈緒どのと一緒でありますように、毎朝、諏訪大社祈願しますよ」

と言ってくれた。

「中川さんも気をつけて江戸におもどりください」

「仲間も待っています。絶対に『ターヘル・アナトミア』の完訳を江戸に持ち帰りますよ」

「さらばにございます」

そんなことを思い出しながら磐音の足は止まることがなかった。

夕暮れ前、大きな川が行く手を塞いだ。

水源を三郡山地の馬見山に発して北東に向かい、直方で英彦山から流れてきた彦山川と合流したのち、響灘に面した芦屋まで十五里余を流れる。

磐音は冷水峠以来、初めて歩みを止めた。

うっすらとかいた額の汗を手拭いで拭いた。

船底の平たい船が黒々とした石のようなものを積んで流れを下っていた。

「旦那は旅のお人のようだね」

背に越中富山の薬箱を担いだ吉原被りの男が話しかけてきた。冷水峠の下り坂から磐音に歩調を合わせて下ってきた男だ。

「長崎から小倉に向かう者だが、六宿街道は初めてじゃ」

「ならば、五平太船の黒い石のことはご存じあるまいな。あれはさ、焚石とも燃石とも焼石とも呼ばれる石炭だ」

「おおっ、あれが石炭か。噂に聞いたことがある」

「筑豊一帯では、昔から百姓が飯の煮炊きに風呂にと、いろいろと使ってきましてね」

「船でどこぞに運ぶのか」

「元々宗像の浜で塩浜の釜を焚くのに使われていたのが、近頃では周防の三田尻やら播州赤穂の塩浜まで売られるようになり、宝暦の御世に掘り抜かれた堀川を使って、洞海湾に送り込まれるんですよ」

さすがに毎年商いに来る薬売りは詳しかった。

「旦那は一気に小屋瀬まで行かれますか」

「そのつもりだが」

「なら、最後の渡しが出る刻限だ。急ぎましょうか」

薬売りに言われて二人は再び遠賀川の土手を下った。

四半刻後、薬売りが、

「なんとか間に合いそうだ」

と河原を指差した。岸辺から少し入り込んだ船着場に一艘の渡し船が舫われ、乗客たちが待っていた。

「そなたはなかなかの健脚じゃな」

「旅の薬売りは足腰が弱いではつとまりませんからな」

と笑った男が、

「私は見ての通りの薬売りで、彌助と申す者にございます」

と名乗った。渡しに間に合って気持ちに余裕が出たのであろう。

「それがしは、江戸の深川に住む坂崎磐音と申す」

「私はまた西国の大名家の勤番の方かと思いましたがな」

「昨年まではそなたの言うとおりの勤番者であったが、故あって長屋暮らしの浪々の身じゃ」

「そいつは気楽でいいやと言いたいところですが、大変だ」

「まったく、その日の暮らしさえ成り立たぬときがある」

薬売りが磐音の頭を振り見て、小首を傾げた。

「旦那の言葉と顔付きは裏腹ですね。まるで浪人暮らしを楽しまれているようだ」

「気性のせいかよく言われるが、これでも内心は悩み多き来し方を過ごしておるところだ」

薬売りが笑い出した。

「渡しが出るぞ！早う乗らんと河原で泊まるこつになるばい」

船頭が叫び、まだ岸辺にいた男女が乗り込み、最後に磐音と彌助が飛び乗った。

そのとき、

「待て、待たんね！」

土手に大声が響き、旅姿の渡世人の一団が走り降りてきた。その数、十人余り、とても乗り込める余裕はない。

「兄ちゃん方、悪いが明日にしてくれんね。船はにっちもさっちもいかんごと乗っとるたい」

船頭が断って、竿を岸辺を差そうとした。

「やかましか！おめえは、だれにものば言うちょるか」

若いやくざ者が船頭の竿を摑むと、

「乗りきらんならおろしゃよかろうもんが」

と船客を睨め回した。

兄貴格二人を従えた親分がゆっくりと土手を降りてきた。

「親分がきたんが見えんか。早う降りんね」

と子分が船頭の竿をひったくった。

「小倉から黒崎界隈を縄張りにする玄海の丑五郎親分でしてね、陰ではよだれくり丑五郎と呼ばれている男ですよ」

薬売りが磐音に囁いた。

「だれがそげんこつば言いよったね」

子分が船を見回して、

「薬売りが言いくさったごつある。降りない、ちっとばっかり痛い目ば見せちゃろか」

薬売りの彌助の顔が真っ青に変わり、

「私はそんなこと言ってませんよ」

と震える手を横に振った。

「やかましか。おれん耳が聞こえんとでも思うちょるか！」

子分が憮然に飛び乗ると彌助に迫った。

彌助は逃げ場所を探したが、乗り合い船ではどこにもない。

「わあっ」

と悲鳴を上げた船客が左右に上体だけを逃した。

それを掻き分けた子分が休みの襟首を摑まえようと手を伸ばした。

その手首が磐音に摑まれ、押し殺した気合とともに捻り上げられると、子分の体はもんどりうって遠賀川の流れに落下した。

「な、なんばしよっとか！」

岸辺から仲間の声が響いて、渡し舟に乗り込もうとした。

そのとき、磐音がのっそりと立ち上がり、岸に飛んだ。

「侍、おまえはなんばしよったか分からんとや」

兄貴分が磐音の前に立った。

「渡し舟はどこも先客順が習わしだ。そなたらは遅れてきたのだ。すでに乗り込まれた船客の皆さんと替わろうなどとはちと厚かましいな」

磐音の声はのどかに響いた。

「おとなしく話ばしょってん埒があかんならたい、ふん潰せ」

玄海の丑五郎が吐き捨てた。

大男の丑五郎の分厚い唇の端がだらしなく開けられ、よだれがだらりと垂れ落ちようとしていた。

「よだれくりの親分、無茶を申していかぬな」

「な、なんば言いよったな。かまわんたい、こん侍ば斬り刻んで遠賀川に流しない」

丑五郎の命に、磐音の前に立っていた兄貴分が長脇差を抜きざま、磐音の胸板に突っかけてきた。

体を開いた磐音が長脇差を持った腕を掻い込むと、膝を下から跳ね上げた。

ぼきり、

という音とともに腕の骨が折れた。

「ああうっ！」

と呻く兄貴分の体を放り投げた磐音の手に長脇差が残った。

「あん野郎が。儀八の仇ば打たんね！」

丑五郎の叫びとともに長脇差が一斉に抜かれた。

その輪の中に飛び込んだ磐音が疾風のように走り回った。

猛稽古でしられる神田三崎町の佐々木玲圓道場で直心影流を修業した磐音の攻撃に耐えられる渡世人などいるわけもない。

峰に返された長脇差が音を立てるたびに悲鳴が上がり、一人二人と河原に倒れていった。

疾風がふいにやんだ。

丑五郎一人が、倒れた子分たちの中に呆然と立っていた。

「こ、こん糞侍が……」

と、よだれと一緒に呻くように言った丑五郎が後退りしていった。

磐音は長脇差を投げ出すと、

「最初の一人以外は、骨は折れておらぬ。打ち身じゃ。ただし、三、四日は痛いかもしれぬぞ」

「船頭どの、お待たせいたしたな。船を出してくれ」

とのんびり命じた。

「こりゃ、魂消たばい。英彦山の天狗が降りて来よったとやろうか」

船頭がぐいっと竿をつくと渡し舟が遠賀川の流れに乗り、船客たちの間から歓声が沸いた。

翌朝六つ、薬売りの彌助と小屋瀬の旅人宿を出た磐音は、黒崎を目指して歩き出していた。

今日の行程は、およそ四里先の小倉城下までだ。昼頃には着く。

彌助は玄海の丑五郎の逆襲を恐れて、磐音との同行を頼んだのだ。

赤間道との追分でもある小屋瀬を出た二人は、秋の野面をゆっくりと黒崎に向かった。

「旦那、ちょいと訊いてよいございますか」

休みが言い出したのは、半刻ばかりも歩いた道中だ。

「小笠原様のご城下に仕官の道でも探しに行かれるので」

「仕官か。いや、そのような用事ではない」

「では、なんの用事なんで。いやね、昨日の一件で旦那に汗を掻かせたもんで、なにかお返しができることがあるかと思いましてね」

「彌助どのに頼むと小倉藩への仕官が叶うかな」

「そりゃ、無理だ。だが、なにかとあろうじゃないか」

「彌助どのはあちらこちらと歩かれて、物知りだ。知恵を借りるとするか」

「へえっ、なんでも聞いてくださいな」

「豊前小倉の遊郭の主で岩田屋善兵衛どのをご存じか」

「はいはい、あのあたりでは知らぬ人はないお一人ですな」

「新しく妓楼を造っておられるという話じゃがな」

「その話なれば、いろいろと問題がございましょうな。ひと月半前に小倉に泊まったとき聞いた話では、岩田屋善兵衛さんも金に困ってござる、近頃では遊女にも客にも善兵衛ではなく、悪兵衛じゃという噂が流れておりました」

「なぜ善兵衛どのは、変心なされたな」

「旦那は、西国界隈の色里番付をご承知ではありますまいな」

「そちらには疎いでな」

「一に長門の赤間関と歌にも歌われるほどに、男衆は赤間関、別名を下の関という湊町の稲荷町に通われますでな。この赤間は、寿永四年三月、壇ノ浦に滅びた平家の一門の官女たちが赤間関に漂い流れて、身過ぎ世過ぎを送るために遊女に身を落としたという謂れのある遊里です」

「彌助どのは、さすがにその道も詳しいな」

「茶化さないでくださいな。この赤間の遊里を仕切るのが赤間の唐太夫という親分だね。善兵衛旦那はこの親分と組んで、小倉に新しい色里を造ろとなされたんだが、それが間違いの因でねえ。小倉藩がそのことを知って、色里新築の冥加金を出すようにと、善兵衛旦那と唐太夫親分に密かに命じたそうな。それで、当初の目論見よりも色里の普請にだいぶ金がかかって、懐が苦しくなり、背に腹は替えられない善兵衛旦那は、阿漕な金稼ぎに走っているという話です」

「なんとのう」

「ところがこの話には裏がありましてね。赤間の唐太夫と小倉藩の町奉行支配下のなんとかいう与力どのとの間には、最初から密約があって、新規の色里の名義人の善兵衛を潰して、あとはうまいように唐太夫が小倉の色里を仕切るという話です。むろん稼ぎのいくらかは、なんとかいう与力どのの懐に流れる算段ですよ」

「呆れた話じゃな」

となると奈緒を小倉の遊里の華として売り出すという話も怪しいものになってくる。

「こんな話、なんぞ役に立ちましたか」

彌助の言葉も耳に入らない磐音は、どうしたものかと考え続けていた。